

幼児期こそ言葉を覚える臨界期

「幼児に何を学ばせるべきか」ということを考えたとき、もう一つ忘れてはならないのが、言葉の“臨界期”の問題です。

何かを学習するときには必ず「学習に適した時期」が存在します。すなわち、ある時期までに学べば簡単に身につくが、その時期を逃すと途端に身につけるのが難しくなるのです。これを“臨界期”と呼ぶのですが、言葉に関して言えば、この“臨界期”は幼児期なのです。

どの国の子どもでも、生後八ヵ月頃になると、お母さんが話しかける言葉をしきりに真似ようとしはじめ、三、四歳までには誰もが自然に母国語の基礎をマスターしてしまいます。

しかし、もしこの時期に十分に言葉を与えられなかったとしたら、どんなことが起こるのでしょうか。その極端な例が、狼少女の話です。

1920年、インドのカルカッタ近くの洞窟から、狼に育てられた二人の少女が発見されました。発見後、二人はそれぞれ、アマラ、カマラと名付けられ、シング牧師によって大切に育てられました。ところが、アマラは間もなく死亡し、その後九年間生きたカマラも、牧師の熱心な指導にもかかわらず、その生涯の間にわずか45の言葉しか覚えることができなかったといわれています。

臨界期内である幼児期なら、三年間で2,000語もの言葉をやすやすと覚えることができます。ところが、その臨界期を過ぎてからはしめた学習では、九年間やって、たった45語です。

また、貧しい言葉しかもたないカマラは、最期まで人間らしい習慣

は何一つ身につかず、笑ったり泣いたりという感情すら表すことがなかったといわれています。

このような例からも、幼児期に惜しみなく十分に言葉を与えてあげることが、お子さんの成長にどれほど重要な意味をもつかがおわかりいただけるでしょう。私の実践する漢字教育とは、そうした言葉の学習を「ふさわしい時期(=幼児期)に、ふさわしい道具(=漢字)を用いて、楽しく行う」ものなのです。